



第2回埼玉の歌人たち

—歌に込めた想い—

2023年11月16日(木)～2024年1月15日(月)

長年埼玉で活躍した8人の歌人が詠んだ自筆の色紙・短冊や原稿などを展示します。

歌人名	No	種別	内容
水野昌雄	1	自筆色紙	「残照に秩父連山輝きてかの蜂起より百年の冬」 水野昌雄 筆
	2	自筆原稿	「梅雨ぐもり」 水野昌雄 筆
	3	書籍(歌集)	『百年の冬』 水野昌雄 著 2007年刊行・初版 生活ジャーナル
田井安曇	4	自筆色紙	「北信濃の谷に生まれて八十二年雪より清しと言ひ難きかも」 田井安曇 筆
	5	書籍(歌集)	『田井安曇集 現代短歌入門 自解100歌選』より 掲載歌「闇にまぎれて帰りゆくこのよるべなきぼろぼろをわれは詩人と呼ぶ」 田井安曇 筆
	6	書籍(歌集)	『水のほとり』 田井安曇著 1976年刊行・初版 現代書房新社
伊東悦子	7	書籍(歌集)	『綾瀬川新秋』 伊東悦子著 2004年刊行・初版 短歌新聞社
		パネル	「濁り水ゆるく流るる綾瀬川さうかお前ももう急がぬか」
	8	書籍(歌集)	『年ごとに薔薇を』 伊東悦子著 1987年刊行・初版 雁書館
	パネル	「年ごとに薔薇を咲かせむわれの児は石に彫りやる名さへ持たねば」	
関田史郎	9	自筆短冊	「擦れ違ひし人は石鱗の匂ひして月高き街わが帰るる」 関田史郎 筆
	10	自筆原稿	「白木蓮」 関田史郎 筆
	11	書籍(歌集)	『風影』 関田史郎 著 1987年刊行・初版 短歌新聞社
金沢邦子	12	自筆短冊	「ぬるぬると柔らかき牡蠣洗い居て失いしものをまさぐるおmoi」 金沢邦子 筆
	13	自筆短冊	「径とみてたどれば細しふくらはぎをやわらかきつばなの穂になぶられて」 金沢邦子 筆
	14	書籍(歌集)	『草の穂』 金沢邦子著 1984年刊行・初版 短歌新聞社
四元仰	15	書籍(歌集)	『黄塵』 四元仰著 1977年刊行・初版 短歌新聞社
		パネル	「紙屑を庭に燃やせばきほひつつ焙みじかし冬日の中に」
	16	書籍(歌集)	『石塵』 四元仰著 2003年刊行・初版 短歌新聞社
	パネル	「日の光騒がしきまで石壁に照り石塵の天にだだよふ」	
毛利文平	17	自筆短冊	「吾が前にそりたつ夜の巨き杉見上ぐれば陰し空の星むら」 毛利文平 筆
	18	書籍(歌集)	『時計』 毛利文平著 1986年刊行・初版 短歌新聞社
	19	自筆短冊	「薄切りに干したる芋ハ吹く風に黄金のごとく煌めき飛びぬ」 毛利文平 筆
川口美根子	20	自筆色紙	「ひいらぎのつましき花さへ咲くかぎり秋十方の光りを集む」 川口美根子 筆
	21	書籍(歌集)	『ゆめの浮橋』 川口美根子著 1985年刊行・初版 沖積舎
	22	書籍(歌集)	『空に拡がる』 川口美根子著 1962年刊行・初版 白玉書房

今回展示している資料は各々の関係者よりお借りました。またこの目録では各歌人を展示順で掲載しています。

埼玉県歌人会のあゆみ

- 1954年：埼玉県歌人会の前身・埼玉歌人会の機関誌「埼玉歌人」第1号が刊行される
11月に、埼玉県歌人会結成記念短歌大会が開かれる
- 1955年：初代代表に小笠原文夫が就任する、事務を大西民子がつとめる
- 1959年：代表に加藤克巳が就任する
- 1964年：『埼玉歌集』第一集が刊行される
- 1968年：大西民子が事務処理の仕事を退く
- 1969年：規約の改正により、初代会長に加藤克巳が就任する
埼玉県歌人会会報「埼玉歌人」の発行がはじまる
- 1977年：「埼玉県歌人会賞」が新設される
- 1978年：「埼玉県歌人会新人賞」が新設される
- 1984年：埼玉県歌人会創設30周年記念大会が開かれる
- 1992年：「埼玉県歌人会大賞」が新設される
- 1993年：会長に清水房雄が就任する
- 1994年：埼玉県歌人会40周年記念大会が開催される
- 1995年：『埼玉戦後万葉集』が刊行される
- 1996年：会長に杜澤光一郎が就任する
- 1997年：土屋文明記念館にて吟行会が開かれる
- 2001年：会長に水野昌雄が就任する
- 2004年：埼玉県歌人会創立50周年記念大会が開催される
- 2007年：『埼玉短歌辞典』が刊行される
- 2008年：会長に大河原惇行が就任する
- 2009年：埼玉県歌人会第100回短歌大会が開かれる
- 2012年：さいたま短歌フォーラム2012が開かれる
- 2014年：会長に金子貞雄が就任する
- 2017年：会長に御供平信が就任する
- 2020年：会長に沖ななもが就任する
- 2024年：埼玉県歌人会が発足70周年を迎える



「埼玉歌人」No.108
2023年10月1日発行

◆今回の企画展にあたり、各歌人の歌集のほか、『現代短歌大事典』(篠弘ほか/監修 三省堂 2000年)、
『改訂版 埼玉短歌事典』(埼玉県歌人会/編集 埼玉短歌事典刊行委員会事務局 2017年)を参考とした。

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。
岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で
遼空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。

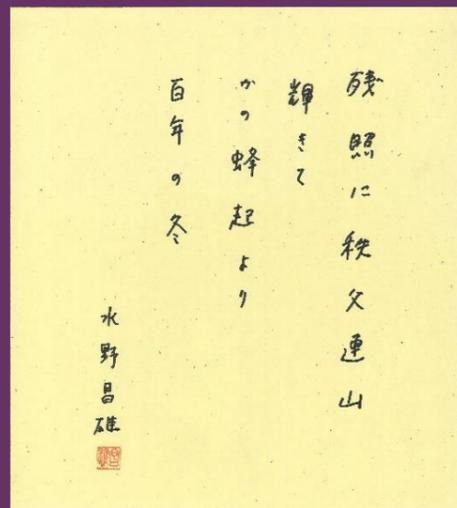


2023年11月16日
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460



1930年、東京都荒川区に生まれる(1960年、埼玉県川口市に転居)。歌人・渡辺順三から短歌を学び、1954年、宮城謙一の「短詩形文学」に入会する。

埼玉県歌人会大賞などを受賞したほか、評論の分野でも活躍し、短歌研究評論新人賞等にも入選。埼玉県歌人会会長のほか、現代歌人協会理事、朝日新聞埼玉版等選者を務めた。『風の季節』や『冬の屋根』などの歌集がある。



水野昌雄自筆色紙(No.1)
「残照に秩父連山輝きてかの蜂起より百年の冬」

秩父事件から100年後の1984年冬の作。川口市から熊谷市内の歌会の指導に向かう折、高崎線の車窓より残照に輝く秩父の山並みを見ての感慨をうたったものという。100年前、政府に負債の延期や税の減少を求めて立ち上がった秩父地方の名も無い農民たちに思いを馳せ、その勇気を輝かしいものとして讃えている。

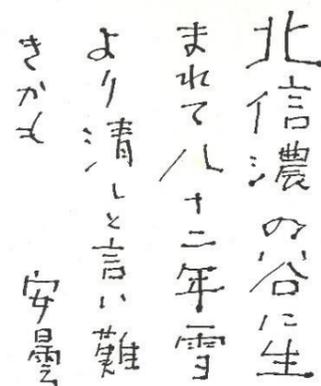
【下村すみよ氏解説】



1930年、長野県飯山市に生まれる(1971年、埼玉県所沢市に転居)。戦後、牧師館に住む高橋富士雄から歌を教わる。1951年、近藤芳美の「未来」創刊に参加、1988年「綱手」を創刊する。

短歌研究賞、詩歌文学館賞等を受賞。聖公会新聞歌壇選者などを務めた。また、歌人・三ヶ島葎子を世に広めた功績により、所沢市教育功労者として表彰されている。『木や旗や魚らの夜に歌った歌』や『天:乱調篇』などの歌集がある。

【常田みえ子氏解説】



田井安曇自筆色紙(No.4)
「北信濃の谷に生まれて八十二年 雪より清しと言ひ難きかも」

歌集『「千年紀地上」以後』の1首。82歳の誕生月の2月。雪深い北信濃、飯山の故郷の雪を思いながら、「清し」と言えないまでもここまで生きてきた感慨にふける。千曲川の流れと、深く積もった雪の清らかさは胸の奥にずっと持ち続けてきた宝とも言える。今、それをあらためて思う。



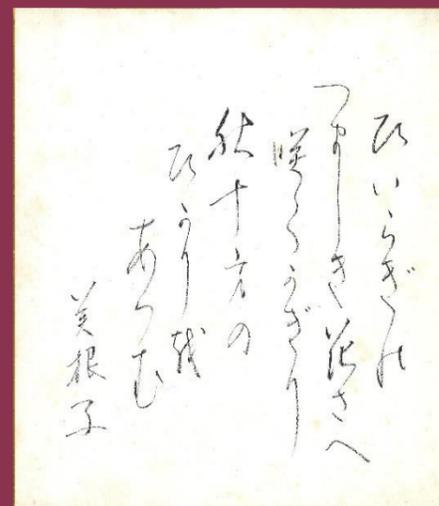
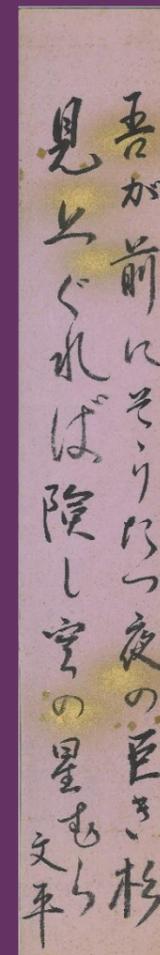
1929年、埼玉県川越市に生まれる。1949年ごろ、短歌を文芸誌「はつかり」に発表する。1957年、鈴木幸輔の「長風」創刊に参加する。

埼玉県歌人会賞を受賞。NHK学園短歌講座講師のほか、埼玉県歌人会副会長および理事を務めた。『姿勢』や『時計』などの歌集がある。

1972年(昭和47年)8月に、十和田湖・男鹿で、第15回長風全国大会が開催された。そのおりに詠まれた「星群」19首の1首。「短歌はこころの文学」と標榜していた氏であるが、夜に見上げた杉の巨木、それをおおう星空、圧倒された作者に緊張がはしる。こころの琴線に触れたのだ。

【本木巧氏解説】

毛利文平自筆短冊(No.17)
「吾が前にそりたつ夜の巨き杉 見上ぐれば陰し空の星むら」



川口美根子自筆色紙(No.20)
「ひらぎのつましき花さへ咲かぎり秋十方の光りを集む」

終の花は11月から12月にかけて咲く白いキンモクセイのような花で、とても小さな花ですが、濃緑の葉の間に確かな存在感で咲き、その姿に美根子は心を寄せたのでしょう。この歌を含む連作「十方の光り」には、散る白牡丹、命のつぎる蟬や黒蝶の姿など、人生の苦しみがにじむのですが、末尾のこの歌が救いになっています。

【佐藤理江氏解説】



1929年、朝鮮京城(現・韓国ソウル)に生まれる(1950年、旧浦和市に転居)。祖父の影響で、15歳のときから短歌をつくりはじめる。1951年、近藤芳美の「未来」創刊に加わる。

角川短歌賞次席に選ばれたほか、ミューズ女流文学賞等を受賞。朝日新聞埼玉歌壇選者や、埼玉県歌人会副会長を務める。『空に揺がる』や『桜しぐれ』などの歌集がある。